

2021年1月10日 礼拝説教要旨

詩編講解説教43「御前に近づく」

詩編43：1～5、ヘブライ4：14～16

42編と43編はもともと一続きの詩編であったと言われています。42編6節、12節、そして43編5節に同じ言葉が繰り返されます。「なぜうなだれるのか、わたしの魂よ。なぜ呻くのか。神を待ち望め。わたしはなお告白しよう、『御顔こそ、わたしの救い』と。わたしの神よ。」この繰り返しのこの詩編を貫くテーマがあります。「なぜうなだれるのか、わたしの魂よ」魂がうなだれている。力なく首を垂れるのです。「魂」(ネフェシュ)というのは、人間存在の最も根本的な部分のことです。創世記の天地創造の物語で、神さまが人間をお造りになられた時に「その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった」(創世記2：7)とあります。この「生きる者」と訳された言葉がネフェシュ、魂と訳されている言葉です。人間の魂、その存在の根本は神さまが命の息を吹き入れられたところから始まります。その魂がうなだれているのです。42編では「わたしの魂は渇く」とありました。ちょうど鉢植えの花が水やりを忘れて首を垂れてしおれているような感じでしょうか。それは人間にとって最も深刻な状態と理解してよいでしょう。しかしその魂の問題についてほとんどの人々は全くと言っていいほど関心がありません。魂の渇きは気付かず放置され、その結果、多くの人々は無自覚のままに魂に餓え渇きを覚えています。

どうして魂が渇くのでしょうか。神さまから命の息を吹き入れられた人間はその後どうなったか。そこまで遡って考えてみなければなりません。ご存知のようにアダムとエバは神さまとの約束を破って楽園を追放されたのです。「いつ御前に出て、神の御顔を仰ぐことができるのか」(42：3)この叫びは実は楽園を追放された時から始まっていた叫びだった。そう理解することもできるのです。お気づきでしょうか。この42、43編には「御顔」という言葉が繰り返されます。これは原文では単に「顔」という言葉です。神の顔、これは旧約聖書ではよく出てくる表現なのですが、例えばアダムとエバが木の実を食べたそのすぐ後で「アダムと女が主のなる神の顔を避けて、園の木の間に隠れると」(創世記3：8)とあります。またヤコブが神さまと格闘した時に、「わたしは顔と顔とを合わせて神を見たのに、なお生きている」(創世記32：31)と言った話があります。また神さまはモーセに「あなたはわたしの顔を見ることはできない。人はわたしを見て、なお生きていることはできないからである」と言われます(出エジプト33：20)。どうしてこのような表現が繰り返されるのか。人間は罪を犯して楽園を追放されたのですから、本来、神さまの御前に立てない者であります。それゆえ神さまと面と向かうと死ぬと言われたのです。わたしたちの人間関係でも、何か後ろめたいことがあると面と向かうことができない。顔向けできないということがあります。わたしたちも神さまに対して顔向けできないのです。そこに御顔を仰ぐことができず、それゆえに魂が渇く、魂がうなだれてしまう根本的な原因があるのです。

けれども今日の43編において、この魂の問題は大きく進展します。「あなたの光とまことを遣わしてください。彼らはわたしを導き、聖なる山、あなたのいますところにわたしを伴ってくれるでしょう」(3節)神さまの遣わされる光とまことがわたしを導いて、「聖なる山、あなたのいますところ」に連れて行ってくれると詩人は言います。「あなたのいますところ」は神さまの住まいということです。具体的には神殿に入って礼拝をささげる様子がここに記されているのです。つまり神さまが遣わされる光とまことによって御前にもう一度回復されるということ

です。ではその光とまこととは何でしょう。それがイエス・キリストを指し示しているということは言うまでもありません。主イエスは言われました。「わたしは世の光である」(ヨハネ8:12) またさらに「わたしは道であり、真理であり、命である」(ヨハネ14:6) 神さまは光であり、真理まことであるキリストを世に遣わされ、このキリストがわたしたちの罪を贖ってくださった。十字架とよみがえりの御業をもって、わたしたちを御顔を仰ぐことができるようにしてくださったのです。ですからこの詩も明確にキリストを指し示しており、キリストの救いを待っているのです。

だからこそ詩人は繰り返し言うのです。「なぜうなだれるのか、わたしの魂よ。なぜ呻くのか。」もううなだれる必要はない。呻く必要はない。この魂が一番安らう場所、神さまの住まいにわたしたちは帰ることができる。そして胸を張って、神さまと顔を合わせることができる。あの放蕩息子の父親が「この息子は死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかった」(ルカ15:24) と言って喜んで息子を迎え入れ祝宴を始めたように、神さまはわたしたちをキリストゆえに喜んで迎え入れてくださるのです。そこにわたしたちの魂の回復、平安があります。

そしてこの魂において平安を得ている者は、たとえ肉体が病んでも、精神が病んでも、なお人間として健やかであると言うことができます。それは特にこのコロナ禍において不安の多い時代に見失ってほしくないことです。昨年の後半くらいからでしょうか。世の中を見てみると占いが流行っているように感じます。テレビでも占いに特化した番組さえ出てきています。いつの時代も人々の心が不安定になると決まって占い師が登場してきてきます。やれパワースポットだとか、開運だと言って人々を惑わすのです。人々はいとも容易くその言葉を信用してしまいます。でも占い師というのは誰一人その言葉に責任を持ちません。当たるも八卦当たらないも八卦です。さして信用するほどのものではない。それなのにどういふわけか人はその言葉に流されていく。それだけ世の中が不安なのでしょう。自分の人生について「こうだ」と言ってほしい。何か指針となるものがほしいのです。

でもそのわたしたちの人生についてはっきりした答えを持ち、最後までその救いを責任をもって神さまは貰われます。キリストによって、わたしたちの人生を贖い、完成へと導いてくださった。帰るべき場所、神さまの住まいへと伴ってくださった。この事実は変わりません。ここに人生の全てがあります。そのことさえ見失わなければ、わたしたちはどんなこの世の荒波も乗り越えていけるのです。